

荒れ地を美田に

— 球磨南部土地改良事業所職員 —

下原開拓地を走ってきた水路は、横山の暗きよ、五四〇メートルをくぐり、そのまま、水無川の川底を横切るサイフォンにつづく。川を渡ってすぐ四〇三メートルのトンネル、再び暗きよを抜け、山裾を大きく迂回する水路へのび……。

まるで、農業土木工法の百科辞典だ。球磨南部八力町村二、五〇〇ヘクタールの耕地をうるおし、また一、〇〇〇ヘクタールの荒れ地を美田に変える命の水を送りとどける、延々二万四、〇〇〇メートルの幹線水路は、ほとんどその全容を整えようとしている。

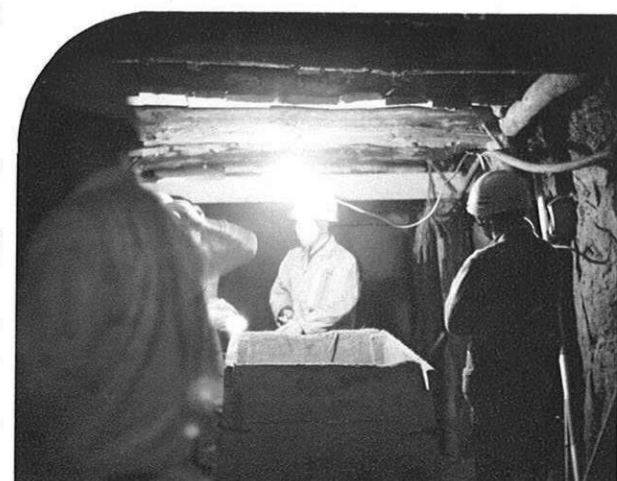


上・事業の土台となる測量は、炎天下の藪で、氷の張る水の中で黙々と続けられる。

★★



下・現場が広範囲に広がっているので、監督には大わらわ。



上・トンネル中央部でシラス層につき当って、作業はにわか緊張した。

左・山をえぐり、川を横切って、延々と水路はのびてゆく。



上・現場から帰ってくると、事業所内で打合わせ。あとの作業計画を検討する。

第一線の人びと 原野に「水」を 呼ぶ

■球磨南部土地改良事業所の職員

人吉市から球磨川を横切って、左岸の台地へのぼってみる。白髪岳北麓にほう大な扇状台地が広がっている。

総事業費七億八、三〇〇万円。受益面積三、五七八畝。米に換算して三、〇〇〇トの増収をはかるという球磨南部土地改良事業の舞台である。

球磨南部土地改良の「水」は、市房ダムからスタートする。市房ダムは、洪水調節、農業用水、発電と、いくつかの目的を持たせて計画された、いわゆる多目的ダムである。市房ダムに貯水した水は、まず、市房第一発電所の発電機を運転したあと、農業用と、第二発電所用へと二分される。

この水が、幸野溝の既設部分一万一、二七畝と、新設水路一万三、二四九畝を流れて、一、一八五畝の既存水田をうるおし、さらに一、〇〇〇畝の畑地、原野を美田に変えるのである。

一方、第二発電所を通った水は、球磨

川と合流し、百太郎堰から取水されて、一万六、二七四畝の百太郎溝を流れ、こられた一、三八七畝の水田をうるおすことになる。

農業土木の百科辞典

昭和三三年、事業がスタートすると同時に事業所が開設された。初年度は、毎日が調査、測量の連続であった。幸野、百太郎の両水路は、ほとんど既存のものを改修して利用するわけであるが、幸野溝下流に新しい水路を延長するため、上流部で大きく水路を変更する必要があるためである。

炎天下に藪をかきわけ、汗みどろになつて測量し、厳寒期に胸まで水に入つて調査が行なわれた。事業所はえぬきのA技師は、苦勞といえは、この頃が一番つらかった、という。

幹線水路総延長二万四、〇〇〇畝の間には、隧道(トンネル)三カ所、水路橋五カ所、サイフォンが五カ所と、近代工法の粋をあつめた施設が数多い。水路は、大小無数の溪流と交叉し、山を越え、裾をめぐり、特異な地形のなかをのびているのだ。規模も、駆使する技術も全国でA級の農業土木事業である。

「まるで、農業土木の教科書みたいなものです。そのせいか、新規採用の職員が、割に多く赴任してきますよ。」とは所長の弁。願ってもない実地勉強の場があ

るわけだ。

農業土木の場合、土木工法だけでなく農業経営に關した知識が要求される。この土質で、どの作物を作り、そのためどの程度の水を必要とし、農家所得、農家経営にどうような効果をもたらすか——水路ひとつを設計する以前に、こうした検討が細かに行なわれなければならない。そして、関係農家の協力を得るための説得も、大切な仕事。

厳しい球磨台地の冬に

また相手は農業用の水である。工事は農作業のない期間に行なわれる。つまり水田に水がいなくなる十月から、苗代の準備をする三月までが工事の勝負である。この期間、昼間の事業所はがらあきになってしまう。職員は連日、吹きさらしの作業現場に、つきつきりになるからだ。

すっかり暮れてしまったなかを、現場にいた職員が、次々に事業所に帰ってくる。そのまま、現場の状況を報告。問題があれば、細かに検討される。設計の変更もしばしばあるのだが、何しろ特殊な地形である。綿密な測量、慎重な設計のあとでも、現場に即した、より効果的な方法を求めて研究が続くのである。

はじめて収穫した「米」を

球磨南部土地改良事業では、もちろん

幸野、百太郎という二つの老朽水路が改修され、近代的な装いで蘇生することが大きな効果だが、特に、新設される一万一、〇〇〇畝の水路によって、全く水のない一、〇〇〇畝の畑地、原野に水が来て、開田すら可能にしたことが大きな意義を持っている。

下原開拓地は、およそ水など及びもつかぬ高原の開拓地であった。酸性黒土、三〇㊦下はイモゴという特殊土壌である。苦しい農業の連続であった。入植以來、頑張り続けた人たちも、或はブラジルへ、或は他の職を求めて二戸、三戸と抜けていった。それでも、みんなは、希望の灯を消さなかつたのである。

待ちに待った水は、昭和三七年五月、カラカラに乾いた開拓地の畑のうち二五畝を水田に変えた。初めてとれた「米」は、土地改良事業所にも届けられた。たとえようのない喜びを、事業所の職員と分かちあつたのだらう。開拓地の人たちは「稲作と、煙草の輪作で、将来の確実な農業経営をたしかめた」と、目を輝やかせているのである。

球磨南部土地改良事業は、四〇年度で八二㊦の進捗率、まもなく全事業を完成させようとしている。

【編集部から】「第一線の人びと」は今回をもって終ります。新年度からは新しい企画により、現地に見る郷土づくりの姿をシリーズにより定着していつて見たいと思います。